

1 次の(1)～(7)の——線部のカタカナを、漢字に直して書きなさい。

(各5点×7)

(1) ニユウセイヒンを食べる。

(2) 親コウコウにはげむ。

(3) 天の川とはギンガのことだ。

(4) 夜空のセイザをながめる。

(5) 答えづらい質問をされてコマる。

(6) その話はショウチしています。

(7) ボウエンキョウをのぞく。

2 次の(1)～(3)のことばのあとに「じつ」としてふさわしいものを、あとから一つずつ選び、記号で答えなさい。

(各5点×3)

(1) ぼんやりと

ア ならむ。

イ 見える。

ウ 走り去る。

(2) じつと

ア 走る。

イ 忘れる。

ウ 見る。

(3) はつきりと

ア 答える。

イ とまどう。

ウ 歩く。

③ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

鬼どもはいっせいに「はっ。」と答えながら、
 ① 鉄のむちをとって立ちあがると、四方八方から
 ② 二ひきの馬を、みれんみしやくなく打ちのめし
 ました。むちはりゅうりゅうと風を切って、ここ
 ろきらわず雨のように、馬の皮肉を打ちやぶるの
 です。馬は、——ちくしようになった父母は、苦
 しそうに身をもだえて、目には血の涙をうかべ
 たまま、見てもいられないほど、いなきたてま
 した。

「どうだ。まだ③そのほうはくじょうしない
 か。」

閻魔大王は鬼どもに、しばらくむちの手をやめ
 させて、もう一度杜子春の答えをうながしまし
 た。もうそのときには二ひきの馬も、肉はさけ骨
 はくだけで、息もたえだえに階のまえへ、たお
 れふしていたのです。

杜子春はひっしになって、鉄冠子のことばを思
 い出しながら、かたく目をつぶっていました。す
 るとそのとき彼の耳には、ほとんど声とはいえな
 いほど、かすかな声がつたわってきました。

「心配はおしてない。わたしたちはどうなっ
 ても、④おまえさえしあわせになれるのなら、それ
 よりけっこうなことはないのだからね。大王がな
 んとおっしゃっても、⑤いいたくないことはだ
 まっておいで。」

⑥それはたしかになつかしい、母親の声にちが
 いありません。杜子春は思わず、目をあきました。
 そうして⑦馬の一ひきが、力なく地上にたおれた
 まま、かなしそうに彼の顔へじつと目をやってい
 るのを見ました。母親はこんな苦しみのなかにも、
 むすこの心を思いやって、鬼どものむちに打たれ
 たことを、うらむ気色さえも見せないのです。大
 金持ちになればおせじをいい、びんぼう人になれ
 ば口もきかない世間の人たちにくらべると、なん
 というありがたいところぞしでしょう。なんと
 いうけなげな決心でしょう。

〈芥川龍之介「杜子春」より〉

(1) ——線①「鉄のむちをとって立ちあがる」と
 ありますが、閻魔大王は、なぜ二ひきの馬を
 むち打つのですか。それを説明した次の文の
 □に入ることを、文章中から五字で書き
 ぬいて答えなさい。(8点)

〈杜子春に□させるため。〉

□
 □
 □
 □

(2) ——線②「二ひきの馬」とは何が姿を変えた
 ものですか。書いて答えなさい。(8点)

□
 □
 □
 □

(3) ——線③・④・⑦はだれのことでですか。最も
 ふさわしいものを次から選び、それぞれ記号で
 答えなさい。(同じ記号を何度使ってもよい)

(各6点×3)

- | | | | |
|---|--------|---|--------|
| ア | 鬼ども | イ | 閻魔大王 |
| ウ | 杜子春 | エ | 鉄冠子 |
| オ | 杜子春の母親 | カ | 杜子春の父親 |
| キ | 杜子春の父母 | | |

③ □
 ④ □
 ⑦ □

(4) ——線⑤「いいたくないことはだまっておい
 で」とありますが、杜子春が「つらさにたえてだ
 まっている様子」が書かれている一文を文章中か
 らさがし、その初めの五字を書きぬいて答えな
 さい。(8点)

□
 □
 □
 □

(5) ——線⑥「それはたしかになつかしい、母親
 の声にちがいません」とありますが、この
 声について、杜子春にかわって作者が感想を述
 べている一続きの三文を文章中からさがし、そ
 の初めの五字を書きぬいて答えなさい。(8点)

□
 □
 □
 □